

木下 樹親（仏文学）

セリーヌの道化的空間

本論文は、20 世紀フランスの作家ルイ・フェルディナン＝セリーヌ（1894-1961）の主要作品 11 点を社会諷刺という観点から編年史的にとりあげ、戯画的技法の諸相および変遷を検討することによって、その創作的想像力の特徴に光をあてる試みである。全体は 5 つの章から成る。

第 1 章は、デビュー作『夜の果てへの旅』（1932）において主人公が卑劣漢と設定されていることを考察し、あえて道化のごとく振舞う主人公の倒錯的な姿勢によって過酷な現実を諷刺しようとするセリーヌの創作意図を指摘している。さらに、こうした作家の手法には、以後の作品における戯画的手法の萌芽がすでに認められることを強調している。

第 2 章は、〈フェルディナン作品群〉3 点をとりあげ、『なしくずしの死』（1936）が〈進歩〉と〈懐古趣味〉というテーマをめぐる滑稽な悲劇であること、『戦争』（1949）については作中人物の命名法や罵倒語の戯画化機能等の分析から、同作が自己同一性の脆弱さを主題にすること、そして『ギニョルズ・バンド I・II』（1944, 1964）が、主人公の妄想と作家自身の幻想との交錯によって、過去と現在、現実と空想との境界が曖昧な物語世界と化していることを、それぞれ論じている。

第 3 章は、反ユダヤ主義誹謗文書 3 点を考察の対象とし、『皆殺しのための戯言』（1937）における自らの感情的文体の優越を主張する独断の文学論、『死体の学校』（1938）での臨床医的想像力と香具師的想像力の相関関係、『苦境』（1941）における作家自身の叙情的瞑想とも呼べる幻想譚などに着目し、セリーヌの独特な思考法を明らかにしている。

第 4 章は、『またの日の夢物語 I・II』（1952, 1954）を考察し、『夢物語 I』に引用された作家自作のシャンソン『おとしまえ』の解釈を通じて、彼の憎悪と極限的な孤独の状況を浮き彫りにする。『夢物語 II』については、セリーヌが物語そのものに〈めまい〉を内在化する独特の手法を導入し、44 年のパリ空爆を、現実と夢が交錯する〈夢現劇〉にまで昇華させたことを指摘している。

第 5 章は、『城から城』（1957）、『北』（1960）、『リゴドン』（1969）から成る〈ドイツ 3 部作〉をとりあげ、語り手に同一化し、己をも笑いの対象とするセリーヌの自虐的手法を明らかにし、さらには〈ドイツ 3 部作〉を諷刺的な道化芝居と見なし、その多様な戯画的側面を検証しながら、狂気と紙一重の道化師たちが跋扈する残酷な一大喜劇を創出せんとする作家の創作意図にも論を進めている。

以上より本論文は、セリーヌの創作的想像力の根幹にはつねにグロテスクと自己醜化の志向が存在しており、その結果、作品には悲惨さのみならず、荒唐無稽や不条理に起因する滑稽さが滲み出ていると結論づける。本論文の功績は、絶望的かつ悲劇的とのみ称されてきたセリーヌ文学において笑いの要素を詳細にわたって分析し、その作品群を「道化師たちの一大道化芝居」と捉える新解釈を提示したことにある。とりわけ、反ユダヤ主義誹謗文書におけるセリーヌが常軌を逸し矛盾に満ちた言動によって、ユダヤ人への攻撃以上に、自己を嘲笑うかのごとき道化性を深化させたこと、かかる自虐的姿勢が以後の小説での語りの手法に常套化したこと、この 2 点を見事に論証している。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が、博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいと認めるものである。